

豆の町（ビーンタウン）から
こんにちは（第1回）

会員家族 住井 円香

編集委・会員家族の住井円香（すみい まどか）さんが高校を卒業してボストン大学に入学しました。ボストンは米国独立にゆかりのある歴史の街であり、多くの有名大学がある学園都市でもあります。そんなボストンでの学生生活を通じ、見たこと思ったことを書いてほしいとお願いしたところ快く受けて頂きました。今回はその第1回です。

■ご挨拶

読者の皆さま、初めまして。

この秋、アメリカ・ボストン大学に入学した住井円香と申します。この度はご縁あり、『偕行』で筆ならぬパソコンのキーボードを執る機会を頂戴しました。

さて、連載の題名の「豆の町（ビーンタウン）からこんにちは」の由来です。自己紹介のところで気付かれた方もいらつしやるかもしれません。ボストンはバイクドビーンズという

インゲン豆を使った伝統料理が有名で、そこから通称の一つとして、ボストンはビーンタウンつまり豆の町と呼ばれています。

「豆の町」から寄せる若輩者の拙文が伝統ある『偕行』に掲載されることに恐縮しておりますが、温かい目で見守っていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いします。

■大学はこんなところ

初めに、私が通うボストン大学について少しだけ紹介させていたいただきます。ボストン大学は、日本の江戸時代後期にあたる1839年に創立されました。現在は学部課程の学生と大学院生を合わせて約3万7千人以上を擁する総合大学です。比較的学生数の規模が小さい大学が多いアメリカでは、在籍者数の多さで有名なです。また、留学生が2割以上を占める国際色豊かな大学としても知られています。

アメリカの大学は地方や郊外に、まるで一つの街のように広大な敷地の中に校舎や寮が集約されているイメージですが、ボストン大学は「キャンパスが存在しない」とよく他大学の学生にからかわれるように、街に

溶け込んだ大学です。路面電車が真ん中を走る大通りの両端にずらりと大学の建物が並んでいます。そのため教室移動のためにちゃっかりと路面電車を利用する学生もたびたび見かけます。

ダウンタウンからは少し離れますが、細長い形をしたキャンパスに並行するようにすぐそばを流れるチャールズ川を挟み、対岸にはケンブリッジ市のマサチューセッツ工科大学とハーバード大学が隣接しています。吉田正尚選手が活躍するボストン・レッドソックスの本拠地、グリーンモンスターで知られるフェンウェイパークまでは歩いて約10分という立地環境です。

■入学前準備

入学前と入学後の2回に分けて、アルコールハラスメント、セクシャルハラスメント防止のためのオンライン講習の受講が義務付けられています。まずは入学前の1回目の講習を終えないと、授業の履修登録ができない仕組みになっています。アメリカでもパーティーなど酒類や薬物が提供される場での学生のトラブルは少なくありません。そのた

め、入学前から講習を行うことで、少しでも学生が自分と周りの学生の身を守るようにすることが目的のようです。

講習の自身は、アルコールハラスメントやセクシヤルハラスメントが起りこりそうな場面のミニドラマの視聴が中心です。そしてドラマを観た後に、自分がそのドラマの登場人物

だったらどのような行動を取るべきかを答えるクイズを受けます。ドラマを観ていて驚いたことは、加害者役・被害者役に性別や人種に偏りなく描いていることです。ある特定の人種の男性が加害者で女性は被害者というような通俗的なイメージではなく「強そうな見た目だから、この人は被害にあわないだろう」というような偏見をまずは払拭しようという意図を感じました。

また、便宜上それぞれのドラマには加害者役と被害者役に該当する人物が登場しますが、加害者役であっても、決して「悪役」として描いているわけではないことがとても興味深いことでした。最初には被害者として登場した人が、その後のドラマでは加害者側として出てくることもありました。ごく「普通の人」であっ

ても、飲酒などをして理性が働かないときに、普段と異なる行動を起こしかねない。その普段とは違う行動が、学生生活の日常の一コマであり、学生生活の日常の一コマであり、学生生活の日常の一コマであり、学生生活の日常の一コマであるということ、それを強調した内容のドラマが多くありました。

日本では見落とされがちなことかもしれないと感じたのが、ハラスメントの目撃者が取るべき行動の紹介でした。目撃者は、加害者を刺激することがないよう、時には「別の人が呼んでいるよ」などどうまく嘘をついて、加害者から被害者の意識を逸らすような誘導をするといった対策方法が有効とされていましたが、こういった手法は日本ではあまり推奨されていないかもしれません。しかし、実際の学校生活や職場といった団体行動でこうした問題を減らすには実践しやすく効果的なように感じ、興味深かったです。

この講座を通して、被害を防ぐために行動することは、被害者を守るだけでなく、誰かを加害者にさせないことにもなるということを指導しているように感じました。そして、

誰もが加害者にもなり得るリスクをあえて強調することで、加害者も普通の人であってその人の人格や行動に問題があったから起きたことだと蔑視しないこと、自分自身が被害者にも加害者にならないためにも、そして他の人も加害者にさせないためにも、リスク回避と自分にできることをすることが大切なのだと思ひました。

■学内でも見られる世界情勢の縮図

人種差別への反対など、学内で比較的意见が一致している問題もありますが、様々なバックグラウンドを持った学生がいるため、どうしても意見が分かれてしまうものもありました。

特に、10月のイスラム組織ハマスによるイスラエルへの攻撃後は、イスラエルへの支援をする団体や、パレスチナ側に寄り添う学生たち双方について見かけるが増えました。ボストン大学自体は、プロテスタント教会・メソジスト派の流れをくみ入学式では牧師が挨拶をするといった名残りはあるものの、公式には無宗教となっています。ただ、異なる信仰を持つ学生を支援するため、プ

ロテスタントの教会のみならず、カトリック信者用の施設、ユダヤ教信者用への施設が用意されています。攻撃があった直後には、大学のキリスト教・プロテスタント系の教会

前で、イスラエルを支援する団体が集会を行っていました。対して、中東出身の学生はインスタグラムでガザ地区を支援する投稿を続けています。先日は、イスラエルに停戦を求めるデモが大学のすぐ近くの橋で行われていました。

今のところ、目立った衝突は学内では起きていません。ただ、「We Stand With Israel（イスラエルと共にある）」とのメッセージを掲げる大学のユダヤ教の施設の窓に、先日「Free Palestine（パレスチナを解放しろ）」という落書きが何者かによって書き込まれていたそうです。こういった「事件」もあり、被害にあったユダヤ教の施設の近くで常に警察官が警戒に当たるようになりました。ちょっとしたきっかけが何か繋がりてしまうかもしれない、危うさのような緊張感の高まりも感じるこの頃です。